発行：平成２３年２月吉日
JASTEC 中部支部

News Letter 研究大会(岐阜) まとめ

昨年、10 月３日、日本児童英語教育学会(JASTEC)の中部支部では、定期研究大会を岐阜・中部学院大学にて開催した。今回の研究大会の趣旨は、必修化が進められている現状の中で、これまでの実践の成果の再確認、そして、児童英語をより広い視野と様々な角度から考える機会にすることであった。そのため、内容もバラエティに富んだものとなった。また、今年度から中部支部では、「ワークショップの充実」と「実践や理論をもとにした発表」の両立を目標としている。その実践となった岐阜大会を支えてくださった数々のご発表に感謝している。

1. ワークショップ①　(10：00〜10：50)

『身体でおぼえる英語』　〜サークルソングで楽しく活動〜

清水万里子先生(愛知淑徳大学(非))

本ワークショップ講座では、小学校外国語活動において利用できるゲーム活動を体験しました。参加者は約 40 名でした。小学校における英語教育は体験を通して学ぶことが前提とされており、その目的は“コミュニケーション能力の育成”です。つまり、英語をコミュニケーションの道具として使いながら、英語言語そのものもついでに学んでしまおうという意図があります。子どもも大人も社会的な生活現場ではコミュニケーション上手なほうがよいでしょう。上手なほうが学校生活も、仕事も、私生活も充実する傾向にあると思います。問題解決方法もコミュニケーション能力の高いほうがスムーズになります。

小学校外国語活動で求められるコミュニケーション能力の育成はどのように育てたらよいのか、本ワークショップでは、「サークルソング」という手法を使って活動を体験しました。活動のキーワードは、nonverbal communication、eye contact、body contact です。この３点に注意しながらコミュニケーションを意識した英語活動を仕組んでいきます。nonverbal communication の活動として、“ハンドリレー”の活動をしました。手順は以下です。40 名全員の集中力が高まる活動になります。授業の最初に行うとよいでしょう。

〇基本：「全員で輪になって座る→手をつなぐ→先生から左へ（右へ）手をギュッと握る→ギュッが戻ってきたら「Done!」と叫ぶ」

〇応用：基本の活動を２つのグループに分けて競争する。

「eye contact」の活動は、トイレットペーパーの芯で作った即席双眼鏡を使い、必ず目を見る活動に仕組み、英語ノート１ Lesson1「世界の国の言葉であいさつ」をしました。輪になって座っているため、自由自在に動き回ることができました。輪になって活動することがポイントです。

「body contact」は、すべての活動において意識します。手にタッチ、握手する、物を渡す、肩をたたく、腕を組むなど、英語の歌とリズムに合わせて踊る際に必ず意識しておきます。

自己表現活動としてフォニックスを意識した自己紹介も体験しました。“ドラマティックに自己紹介”です。Hello, my name is Marvelous Mariko. Hello, my name is Happy Haruka. などです。英語、日本語問わず、音を楽しむという意味で Hello, she is まじめな Mariko. というのも OK としました。輪になって活動する英語教育的なサークルソングは、♪Let's sing hello、♪Hello, everybody などを利用しました。最後は輪を二重にして手をつなぎながら左右に動き、輪唱しました。歌は♪Shalom my friend です。

本ワークショップは「お互いの顔の見える大きな輪で活動する」ことがポイントです。コミュニケーション能力は“顔を見て活動の中で一体感を感じながら育成できること”が重要であると考えています。小学校外国語活動はそのための基本活動だと思います。

2.　ワークショップ②　(11：00～11：50)

「犬の鳴き声は、“ワン”じゃなかった！」
～CD 付き英語絵本　“The Turnip”『かぶ』を使った英語活動～

佐藤可奈子(ラボ教育センター)

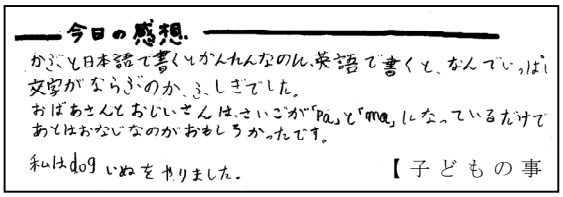
◎今までの「英語活動」のイメージをリセットして

司会の先生の次のご紹介でワークショップをはじめました。「ラボの英語活動は分析的に単語や定型表現を教えるという手法ではなく、子どもたちに英語を総合的にまるごと与えるというユニークな手法をとっています。この時間は、みなさんの知っている英語活動のイメージをリセットして参加してください。」

◎「初めて英語で物語を聞く」ってどんな感覚？

ワークショップの目的を、「子どもたちは英語にどのように近づいていくのか？」「どのように興味を持つようになるのか？」、子どもと同じように体感して頂くこととしました。しかし、当日の参加者の方々は英語が堪能な方たちなので、英語では子どもと同じ体験をすることは、もうできません。そこで今回は、別の外国語の CD 教材を使用しました。物語のタイトルを伝えず、「ある外国語でお話を聞いてください。」とスタート。聞き終わったあとの感想には、「この音はこういう意味かな？」「タイトルはあれかな？」「全然わからなかった」などがありました。実は、使った教材は韓国語の『はらぺこあおむし』(ラボ教育センター刊) でした。つづいて、韓国語と日本語を交互に収録した CD でもう一度、おはなしを聞いて頂きました。すると今度は「同じ外来語が、韓国語と日本語とでは表わし方が違っていて面白かった」「くり返し出てくる言葉は言えるようになっちゃいました」「この音はこういう意味かと推測できた」など、様々な「体感」を聞くことができました。

◎子どもたちの持っている能力の高さを信じて



次に、実際の授業での子どもたちの様子や感想を、映像も交えてご紹介しました。子どもたちは性格も学びのスタイルも様々ですが、各自の興味から出発し、それぞれの方法で、自分のペースで英語に近づき、英語への興味を高めていくのです。子どもたちの英語の環境として、物語（絵本）という素材に大きな可能性があります。終了後、何人もの先生方から、教員養成や研修で同じワークショップをしてみますと、韓国語版教材のお問い合わせを頂きました。指導者は子どもの能力の高さを信じ、「どこからでもいいよ」「好きなところから入っておいで」という姿勢で、豊かな環境を整えることが大切だと思います。

3. 授業実践・研究発表①-Ａ部屋(13:00～13:30)

「聞きたい・話したい気もちを高める授業を目指して」
～知的好奇心を高める授業から温かな学級集団づくりを目指すまで～

浜中美咲(石川県内灘町立清湖小学校)

浜中先生は、英語の専科教員でもなく、専門も英語ではない。その浜中先生は、英語活動に奮闘している担任の気持ちや現場の事情をくみ取りながら、どの先生にも無理なく英語活動に関わることができるようにと、丁寧な指導過程、学習内容、児童の興味関心を大切にした手法や教材開発に、日々努力してみえる。ここ数年、毎年、浜中先生より岐阜県の中で先進的に英語活動を推進している学校へ視察に行きたい、と連絡が入る。新しい考え方や視点を常に探し求めて研鑽してみえる浜中先生だからこそ語れる授業実践の内容であった。タイトルにもあるように、小学５・６年生の知的好奇心をくすぐる学習内容を設定していく視点として以下のようにまとめられていた。

① 体験的な活動を取り入れる　② 他教科の内容を取り入れる
③ もの身近なことを取り入れる　④自己選択・自己決定の場を設ける
⑤ 際理解の視点を取り入れる

自分のほしい民族衣装をグループで買い物をする活動を１つの例として紹介された。その活動の中で、私が思わず「うれしい」気持ちになった言葉がいくつかあった。まず一つ目は、「グループで協力して」である。浜中先生は、学習集団の育成という視点を常に念頭に置きながら、授業実践してみえる。これは、担任だからこそもてる視点である。二つ目は、「使っていいのは、知っている英語とジェスチャーだけである。なんとか伝えようとする場面設定。」である。ありがちな授業の中には、児童に発話させたい表現を繰り返しリピートさせたり、リズムをつかって繰り返し覚えさせて、さぁ次にコミュニケーション活動!! といった流れを見ることがあるが、真のコミュニケーション活動とは、話したい、伝えたいという心の欲求のもとで伝え合う活動である。そのような場面を教師側が事前に設定しすぎて、子どもの自由な発想を引き出すところまで行かない活動が多々ある。しかし、浜中先生は、児童に「自ら何とかしてその場面を乗り越えさせる」体験をさせている。だからこそ、日本の布製の色の混じったぞうりを「colorful sandal」と表現した児童が出てきたり、また、モンゴルの財布のことを「money bag」と自由に発想する児童が出てくる。さらに、モンゴルのブーツを「animal boots」と表現したのには、思わずなるほど、とうなずいた。

前述の５つの視点をフィルターにして、英語ノートの学習内容を加筆修正しながら、児童の実態に応じて担任の先生が楽しく授業を進められている清湖小学校の先生方のご努力に感銘を受けた。

参会記:新井謙司(岐阜高山 松倉中学校)

4. 授業実践・研究発表①-B教室(13:00～13:30)

「小学校英語教育　学科横断学習の理論的考察：算数導入の方法」

田中真紀子(神田外国語大学)

『表題に「理論的考察」とあるように、これは理論であって、実践ではない』と、初めに説明があったが、結論から言うと、『小学校の英語となると、理論の裏付けとなる実践がなければ、更に実践を促がす理論でなければ・・・十分理解できない』というような意見がフロアからでた。わかり易く言えば、発表者自身が、実際の小学校の英語の授業の中で、横断的学習として算数を導入する実験をしてみて『・・・どうだった』と言う発表をして欲しい、との意見もでた。事実そのような英語の授業を、試行錯誤しながらやっている学校も、あるにはあるので、そのような小学校と連携をとって実験してみたらどうかと言う助言もあった。

横断的学習と言うのは、6年生の英語の授業の中で、教材として算数（数字）を使うのではなく例えば3年生の時に習ったはずの分数を、英語の表現を使って、ケーキを分割し、ケーキの数え方を学び、分数の大きさを知る、(分母は同じ)。更に分母・分子の数が異なる分数の大小を比較してみる一通分する一などをすることである、との説明もあった。なぜそのような学習をするのか、と言えば、

＊５・６年生の知的レベルに比べて導入しようとする英語の授業が一歌や簡単な日常会話やゲームでは一低すぎるから「その点のバランスを考えるべきである」と言うことと、

＊英語を担当するのは担任教師だから、「自分の得意分野を英語の時間に応用することは容易ではないか」との推測から生まれた考えのようであった。従ってそのためのカリキュラムは特に作らず、算数も文章題などは扱わない、とのことであった。しかしそのような授業を、時に応じて展開できるのは、算数の本質を熟知した先生でなければならないことが前提であるが、そのような先生でも、今まで経験したことのない英語の授業に、横断的に自分の得意分野を導入することができるだろうか・・・疑問である、との意見が多かった。

小学生の知的レベルと英語の言語レベルとの隔たりについては、次の段階の問題である。

最後に時間に追われていた事もあって、発表がやや早口でなされたので『よく聞き取れなかった』との意見もあり、これはプログラムの作製を担当した、我々の反省点であった。

参会記: 松村美佐子

5. 授業実践・研究発表②-Ａ部屋(13:45～14:15)

「英語ノート」を使った自己表現活動の段階的指導の工夫

加藤拓由(春日井市立神屋小学校)

加藤先生は、これまでもJASTEC中部支部の研究大会にて、ご自身の授業ビデオを使った授業実践や担任が安心して授業ができるような授業過程の工夫についてご発表をされてきた。今回は、英語ノートを生徒の興味関心を大切にした効果的な自己表現活動につなげるコツをご紹介された。そのコツとは以下のものである。

① 導入部分での工夫
　メインの自己表現活動につなげる小さな活動(帯活動)を毎回授業の中で設定する。
② 各種のアクティビティーのアレンジ
　英語ノートにある活動をもう一工夫する
③ 聞き手指導の工夫
　英語の聞き上手を育てるためには、聞く力のある学習集団の育成が欠かせない
④ メインの自己表現につなげる「一歩手前の活動の工夫」
　スムーズに自己表現活動へ児童を誘う工夫

このようなフィルターを通して、英語ノートを多角的に活用する加藤先生のご発表から感じられることは、児童の思考の流れを１番に大切にしながら、児童の立場にたって、先生も楽しみながら授業をしたい、という熱い思いである。先生が楽しめない活動内容は、やはり子どもたちにとっても、なじめないのである。それを１番わかるのが担任の強みである。また、加藤先生は、他教科と関連づけながら、活動に一工夫を加えている。私が英語専科教員として授業をしているとき、担任の先生が学級に「これって〇〇の授業の時に〇〇さんが気付いたことだったよねー」と補足されました。その時、担任の先生の強みを肌で感じたことを覚えている。加藤先生は、そういったことができる担任だからこそ、ただ英語ノートの活動だけを機械的にこなしていく英語活動ではなく、児童の実態を大切にしながら、アレンジしていくコツを様々な場で、ご発表されていくご努力に感銘を受けた。

参会記:新井謙司(岐阜高山 松倉中学校)

6. 授業実践・研究発表②-Ｂ部屋(13:45～14:15)

「児童英語教育における英語落語の活用について」

池亀葉子(子ども英語落語協会)

最初に、長テーブルを二つ寄せて、その上に座布団置き、発表者である池亀先生ご自身がそこに座られ、落語のさわりを実演されながら英語で分かりやすく披露された。当然であるが笑いがこみ上げ、場の雰囲気が一気に和んだ。この雰囲気にすぐに引き付けられた方は、私だけではなかっただろう。落語の世界は演劇などと違い、高座という何もない座布団一枚の小さな空間であり、道具は扇子と手ぬぐいだけという世界であることを説明された。それだからこそ言えるのだが、ここで一番大事なのは、imagination であると説明された。

小学２年生や５年生の男の子や女の子たちの落語の一部を映像で紹介されたが、知らず知らずのうちに想像力を働かせながら見聞きしている自分を発見してしまった。それだけこのimagination という語の重要性を認識せざるを得なかった。そして私たちは笑いによって心の開放を味わい、さらに場は和み、池亀先生が日頃から子どもへの指導を落語を通して英語に触れさせ

ようとする意図が、より一層強く伝わってきた。
　これまでに、これほどの笑いを誘う発表はなかったように思う。落語だから当たり前のことだと言えばそれまでだが、だからこそ、落語を通して英語表現をすることのねらいは、それが当たり前になっていることが将に驚きであった。そればかりか、子どもたちの英語での表現力は素晴らしかった。池亀先生が落語を通して passive speaker が active speaker に変わっていくという話をされたが、子どもの落語を演じる姿が映像を通してそれを証明していることがはっきりと見て取れた。落語を演じるために何度も練習することで、子どものたちの imagination 能力が十二分に育まれていくということを、子どもたちの生き生きした身体表現と英語表現が雄弁に物語っていた。本発表は非常に多くのことを考えさせられる、また教えられる発表であった。
　どの子どもも imagination は潜在的に持っていて、鍛えることにより誰にでも生まれてくるもので、工夫して使うことで英語が定着していく、と話された池亀先生の落語への思いを強く感じた。そしてその思いを見事に表現している子どもたちの生き生きした姿に感動すら覚えた。
　この発表から、子どもが潜在的に持つ可能性を如何に引き出すかが児童英語に関わる私たちの使命であると痛感した。
　最後に、落語を通して英語に触れるこの運動を全国に広げていきたいと語られたが、その波に乗れるものなら乗ってみたいと思った。

参会記：駒澤利継

7. 授業実践・研究発表③-Ａ部屋(14:30～15:00)

「児童と英語でインタラクションをするためにどのような調整が行われているか
ー小学校外国語活動における Teacher Talk の分析からー」

江口朗子(愛知教育大学大学院生)

　小学校で先生が英語で授業をするなかで、その英語を分析してみると何か特徴が見えてくるはずだ。先生は意識的にしろ、無意識的にしろ、生徒により分りやすいようにどんな「調整」をしているのだろうか。この「調整」を明らかにすることで、英語に自信が持てない小学校の先生方の英語の授業に寄与することができないだろうか。江口先生の発表はその思いを基盤に数字とパーセントと統計で「調整」を示してくれた。冒頭、江口先生は先生の使われた「調整」という表現が的確なのかどうか？という旨のことを言われた。ならばどんなことばがいいだろうか？と私はそのことばを捜しながら発表を聞いていた。「工夫」「試み」「加減」「調節」「戦術」「戦略」「かけひき」「作戦」「策略」「計略」・・・？考えるほど「離れて」いくようで、考えるのをやめた。
　江口先生の研究で、「繰り返し」「理解の確認」「ジェスチャー」という３つの「調整」が発見された。この中の「理解の確認」だが、生徒が分っているかどうかの確認方法の例として「本当の意味での質問」(Referential Question)と「答が分かっていてする質問」(Display Question)を江口先生が示された。「答が分かっていてする質問」を先生が多用すると「分りません」という「みすぼらしい」状態に陥る生徒を発生させることになる。そしてクラスは「答が分かる」成績優秀生徒がはぶりを利かせる状況になる。だから、みんなの目が活気にあふれて英語を楽しく思うように、正しい答・間違った答のない「どう思う？」質問を入れたい。個人的にこんなことを思っていたら、江口先生の発表は終盤になっていた。
　英語力不足を不安がる小学校の先生！ジェスチャーも交えて発話は短くシンプルでいいんですよ。江口先生の発表はそれを教えてくれた。

参会記　(箕浦　永生　English House 主宰)

8. 授業実践・研究発表③-Ａ部屋(14:30～15:00)

「短期大学における児童英語教師養成について」

加藤あや美（名古屋短期大学）

私にとって、今回の児童英語教育学会中部支部大会は、2 回目の参加であった。特に、今大会では、研究発表の機会もいただいた。私は、児童英語教育の分野に興味を持ち、飛び込んだのも、昨年頃で、まだまだ駆け出し中である。そのため、この学会に出席する度に、研究発表やワークショップを聞き、目から鱗の情報を得ている。そんな中、今大会で「短期大学における児童英語教師養成について」というテーマで発表をさせていただいたのである。

発表の目的は、短期大学在学中の 2 年間で児童英語教師をいかに養成できるか、また、短期大学卒業後に児童英語教師として進路選択の可能性があるかどうかということを考察するものである。今年の夏に、私はオーストラリアのシドニーにある語学学校 LETS において、児童英語教師育成（TECSOL）コースと小学校英語指導者（J-SHINE）資格取得プログラムを 6 週間にわたり受講してきた。その研修の中で、児童英語教師養成において不可欠であろうと考えられるトレーニングがいくつか見えてきた。そこで、自分が所属している名古屋短期大学英語コミュニケーション学科をサンプル校として取り上げ、現状のカリキュラムでは、十分な科目を提供できておらず、児童英語教師を養成するには難しい実状であることを紹介した。とりわけ、短期大学での児童英語教師養成に必要と考えられる要素として、次の 4 点を挙げた。①十分な模擬授業の実践と指導、②現場での授業観察、③多角的な教材研究、④各年齢での特徴の把握、この 4 点である。現在、今回のサンプル校には、早期英語教育法と早期英語教材研究の 2 科目しか児童英語教育関連の科目は存在しないため、児童英語教師養成のために必要とされる 4 つの要素を扱いきれていないことを述べた。そのため、新たに早期英語教育授業実践という模擬授業の頻度を増やしたり、現場実習を組み入れた科目の必要性を提案した。今後は、カリキュラムのみならず、実践的なアプローチをしていくことが課題であると思われる。

児童英語教育を専門とされている先生方の前での発表は、とても緊張しましたが、発表後、懇親会でもたくさんのコメントをいただき、私が考えているようなテーマで成功している学校の例などを教えていただき、大変勉強になりました。今後も、さらに研究を深め精進していきたいと思います。司会を担当して下さった至学館大学の杉浦先生をはじめ、温かく見守ってくださった事務局の先生方に心より感謝申し上げます。

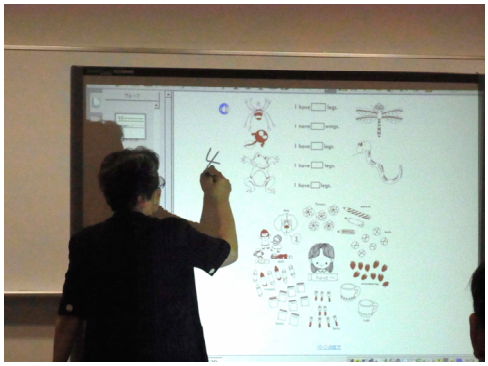
9. 久埜百合先生　ご講演

「ITC 時代の小学校英語で　～子どもたちにとって大切なもの～」

久埜先生は、JASTEC 創立当時から理論と実践の両面に通じる貴重な存在である。今なお、文科省も現場の先生方も頼りにしており、今回も「この研究会に来て良かった」との声が多く聴かれた。ご講演の内容は、多岐にわたり深く掘り下げられ、事例も豊富で内容の濃いものであった。先生の中では、常に子どもが中心に存在している。子どもの言語獲得の仕方に精通しておられるだけでなく、先生ご自身が子どものような好奇心、飽くなき探求心を持ち続けておられることは驚嘆に値する。それが現在も現場を支えている教材「えいごリアン 2000～2001」を生み出したのであろう。多岐にわたったご講演の内容を列記することにする

① 子どもの学ぶ力に寄り添う指導を可能にするために
② 「外国語活動」(学習指導要領)で求められるもの　小学校課程に外国語(英語)を導入するにあたって

③ 英語に触れ始めた子どものプロセス “英語の何を身につけるのか”
④ 指導する側の視点
⑤ コミュニケーションを図ろうとする積極性を養うために
⑥ 「音」による英語との出会い　質が保証された英語を聞かせるために
⑦ 指導する側に求められるもの
⑧ 指導順序と系統性のある指導計画、カリキュラム・デザイン
⑨ 電子ボードの効用と教材紹介
⑩ 文字に親しませるプロセス　文字を書き始める前に経験させたいこと



ご講演の最後に、先生が創られた電子ボードを活用した教材の紹介があった。先生が創られる教材はどれも賭け値なしに面白い。質の高い面白さなので何度見ても飽きることがない。最近開発された Touch and Learn は、観るだけでなく子どもが参加型で楽しみながら英語が身につく「言葉が本当に使える場」が設定されている。そのアイデアの豊かさ、奥の深さの根底に先生の子どもへの愛情を感じる。子どもの無限の可能性を引き出すために教師の指導技術をサポートする工夫が込められている。現場は、ここまでの質を確保してほしいという厳しい中に温かさを感じるご講演であった。

教材については、時間の関係で、氷山の一角にしか体験できず、この教材を使ったワークショップを是非開催してほしいと会員からの暑い要望があったことを申し添えておく。

参会記：片桐多恵子（中部学院大学）

10. まとめ

先日、校区内の小学校の国際理解担当の先生と打ち合わせをした際に次のようなことをぽつりと… 「クラスルームイングリッシュもなかなかさっと出てこなくてねー。慌ててしまうんですよ。それに ALT の先生にどうしても任せてしまうしね… 」と。完全実施に向け、中核教育研修を受けた先生が自校で研修を開き他の教員へ広めていくという体制をとってはいるものの、やはり授業を実践して、多くの経験を積み上げないと、担任の先生方の柔軟な発想は、発揮されてこない。まして、子どもたちと英語でのやりとりを楽しむところまでは到達できない。週１時間の授業をきっちりと行っても、年間 35 時間。３年間で、105 時間。これは中学校の１年間の授業時数と同じである。このくらいのゆったりとした時間の確保が日々の業務で忙しい担任とっては必要であると感じている。やはり、実践をしながら工夫改善である。

そのように、どの小学校においても英語活動が本格的になるにつれて、やはり忘れていけないことは、この英語活動が児童にとって、「本物の意味をもった言葉のやりとり」であるかどうか、という原点である。その観点から、本研究大会の内容を振り返ると、児童の知的好奇心をくすぐる指導・手立て、教師側の研修、本物の言葉のやりとりが産まれる環境づくり、落語、長年の実践を他教科と結ぶアイデア、そして、ICT の活用といった多岐に富んだ内容であったことは児童の「言葉を使った本物のやりとり」を生み出す授業づくりを多角的にとらえることができ、とても充実したものになったととらえている。今回、ご発表していただいた方々には、心より感謝を申し上げます。ありがとうございました。そして今後とも JASTEC をご活用していただき、ご実践を広めていただけたら幸いです。

このNEWS LETTERをごらんになった読者の皆様より、ご意見やご感想、そして、JASTEC中部支部へのご要望などがございましたから、下記までご連絡をお寄せください。

kenjia1026@ybb.ne.jp

JASTEC中部支部 役員 新井謙司
岐阜県高山市立松倉中学校 教員